

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02052

研究課題名(和文)ウガンダ農村社会における在来知に配慮した「食育」の可能性

研究課題名(英文)The Potential of "Food Education" with Attention to Indigenous Knowledge in Rural Communities of Uganda

研究代表者

佐藤 靖明 (Sato, Yasuaki)

長崎大学・多文化社会学部・准教授

研究者番号：30533616

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：ウガンダの農村において、食に関する生活の現状と知識の世代間伝達について把握し、在来知と科学知を組み合わせた「食育」の方法を示すことを目的とした。

世帯と小学校でのインタビュー調査をおこなった。それと平行して、小学校の指導要領を調べた。また、在来知と科学知の関係の事例として、地域の主食であるバナナの遺伝子組み換え品種の導入をめぐる議論をレビューした。

その結果、この地域では各世帯が食をめぐる知識の核となっていること、在来知と対立的なものと捉えるほど科学知の情報が広まっていないことが明らかになった。つまり、在来知をベースに科学知を載せていく教育、また、日常実践を活かす教育が有効であると考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本科研により、アフリカ農村の食の持続性を考える基礎研究が実施できた。アフリカ研究は、従来の社会文化特徴に重点を置くものと、現代的な課題や開発目標に注目したものの2極がみられる。この研究は、アフリカの食について教育、知識という観点から改めて考察したものであり、とくに、人びとの保守的な特徴を浮き彫りにすることができた。食に関する開発や支援をおこなう場合には、この知見を参考にすることが期待される。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to understand the current state of dietary habits and intergenerational transmission of knowledge in rural Uganda and to suggest a new method of "food education" that combines indigenous and scientific knowledge.

Interviews were conducted with households and at elementary schools. In parallel with this, I checked the teaching guidelines for elementary schools. I also reviewed the debate on the introduction of genetically modified varieties of bananas, a staple food in the region, and compared it to farmers' knowledge.

The results revealed that each household is the core of knowledge and that scientific knowledge is not widespread enough to be considered as opposed to conventional knowledge. In other words, the education which places scientific knowledge on a base of indigenous knowledge, and makes use of everyday practices is considered effective.

研究分野：生態人類学、民族植物学、アフリカ地域研究

キーワード：ウガンダ 食育 在来知 食生活 食文化 農業 バナナ アフリカ

## 1. 研究開始当初の背景

人口の大部分を小規模農家が占めるアフリカ大陸において、栄養学的な充足と食料確保の持続性を支えてきたのは、多様な植物種の採集・栽培、利用、分配にかんする在来知である。食料の入手、消費や分配に関しては、人類学、モラルエコノミー等の見地からその精緻なシステムが分析され、食文化については、各地の食材と料理を比較し、食事内容を体系的に理解する研究が進められてきた。つまり、アフリカで特徴的にみられる〈栽培・採集〉〈加工〉〈消費〉のしくみが議論されてきた。

一方、アフリカの自然環境や政府は不安定であり、食料や栄養をめぐる政策、援助、生産・流通・消費システムの構造や変化を俯瞰するポリティカルエコロジーやフードセキュリティーの研究も進められてきた。また、農家の食料自給力の低下を防ぎ、経済・栄養状況の改善につなげるための応用研究もみられる。このように、外部社会からの影響とその農家の対応、介入の方策が議論されてきた。

しかし、食に関する知識や技術、感覚が次世代に伝えられることについての学術的知見は、アフリカ大陸に関してはほとんど蓄積されていない。そのため、知識が継承されるシステムと実態を明らかにする必要がある。また、現在のアフリカでは、多くの子どもが小学校に通っており、食をめぐるフォーマルな教育の影響も考える必要がある。そこで、これらの経緯と課題を包含する「食育」に焦点を当てて研究をおこなうことを計画した。

## 2. 研究の目的

本研究は、ウガンダの農村を事例として、世代間での食をめぐる知識の継承・教育がいかにおこなわれているのかを明らかにし、在来知と科学知を組み合わせた「食育」の方法を新たに示すことを目的とした。

## 3. 研究の方法

日本・欧米とアフリカでは食をめぐる文脈が大きく異なり、日本・欧米の食育の枠組みをそのまま用いてアフリカの「食育」を分析することはできない。そこで、理論的なアプローチから始めるのではなく、フィールド調査をおこない、現地の実態をもとに「食育」を考えることにした。具体的な方法は以下の3つである。(1)食生活：食事調査と食品サンプルの栄養分析をおこない、科学的な観点から現状を把握する。(2)食料自給：各世帯に、食料自給や商品化の傾向の変化とその背景を聞き取る。(3)在来知・科学知の伝達：農作業、調理、食事、学校生活の場面で、食にかかわる在来知と科学知がどのように知識が伝達されるのかを把握する。

研究期間の途上で、新型コロナウイルス感染拡大の影響によりフィールド調査が困難となった。そのため、(1)~(3)の調査を簡略化するとともに、実施可能な研究方法として、小学校の指導要領を調べる文献調査も組み込んで考察することにした。また、現地の食に関する在来知と科学知の関係を明らかにするケーススタディーとして、地域の主食であるバナナをとりあげ、政府が開発している遺伝子組み換え品種の導入をめぐる議論や、ウガンダ以外の地域の人びとの知識についてもレビューした。そして、自身の過去の調査結果と現地在住の人へのインターネットをとおした質問調査も組み合わせて議論することも試みた。

## 4. 研究成果

2018年度と2019年度の現地調査では、主に小学校高学年の児童を対象に、食生活や食の経験、知識にかんするアンケート調査を実施した。具体的には、食事調査、生徒の弁当の記録、家庭での食卓風景描写の収集をおこない、家庭でのインフォーマルな食とフォーマルな教育の両方を把握することができた。そして世帯への聞き取り調査も加え、以下のことが明らかになった。

(1)家庭の食生活では、でんぷん質の主食と野菜等の副食という、アフリカで典型的な組み合わせのパターンが強く維持されている。

(2)主食であるバナナの生産量が近年減少しているにもかかわらず、バナナを中心とした食生活は維持されている。

(3)家庭での食生活は栄養バランスがとれたものである。しかし学校での昼食については、児童が持参する弁当だけでは栄養が偏る傾向がみられる。また、世帯の家計状況によって、補助的な食品へのアクセスが異なる。

(4)家庭において食事のマナーも教えられており、それはフォーマルな教育と切り離されている。

また、小学校の指導要領を調べることで、以下のことが明らかになった。

(5)小学校では、4年次以降の農業や、6年次の理科における栄養学の中でしか食がとりあげられておらず、社会科ではほとんど教えられていない。

これらのように、各世帯で継承されている食生活や在来知と、公教育の中で食べられている食や教えられる内容には、隔たりがあることが明らかになった。この成果については、主に民族生物学会(The Society of Ethnobiology)の学術大会において発表をした。

2020 年度以降は、上記の考察を深めるとともにバナナをとりあげた。具体的には、その世界各地での扱われ方の違いや共通点を踏まえたうえで、ウガンダにおける遺伝子組み換えバナナをめぐる議論を整理し、以下の考察をおこなった。なお、遺伝子組み換えバナナは、2023 年 6 月時点でまだ一般での栽培が法的に認められていない。

(6) 遺伝子組み換えの技術や品種は、メディアや国会、学界の場で議論が激しく交わされてきたが、農民にとってはよく知られておらず、かれらは自身の経験や知識をもとにそれらを考える傾向がある。つまり、現時点では科学知をベースとした考え方をしていない。

(7) 農民の在来知には、もともと外来のものを受け入れる特徴がある。もし遺伝子組み換え作物の栽培が解禁されると、慎重さを保ちながら、それらの品種を畑に新たに取り込むことが考えられる。

(8) 遺伝子組み換え品種をめぐる既存の議論の中心は、社会経済的な階層を想定した農民の権利である。それに対して在来知を中心とした議論の中心は、農民がおこなう栽培行動の主体性である、といった違いがある。

これらの成果については、日本アフリカ学会の学会誌（『アフリカ研究』）、ならびに食科学の国際会議（Symposium Toward the International Society for Gastronomic Sciences and Studies）などで発表した。

以上のように、研究対象地域では各世帯が食をめぐる知識の核となっていること、在来知と対立的なもの捉えるほど科学知の情報が広まっておらず、家庭での知識の獲得や継承が食において重要な役割をもっていることが明らかになった。そのため、在来知をベースにしながら科学知を載せていく教育、また、日常的におこなっている栽培、調理、食事の実践を活かす教育が有効であると考察した。

アフリカ研究は、従来の社会文化特徴に重点を置くものと、現代的な課題や開発目標に注目したものの 2 極がみられる。食をめぐる本研究をとおして、人びとの保守的な特徴と、積極的に外来のものを受け入れる両面を浮き彫りにすることができた。アフリカにおいて、食に関する開発や支援をおこなう場合にも、これらの知見を参考にすることが期待される。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 佐藤靖明・池谷和信	4. 巻 34
2. 論文標題 人類とバナナ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Biostory	6. 最初と最後の頁 6-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐藤靖明	4. 巻 34
2. 論文標題 バナナと文化 食をめぐる関係の諸相	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Biostory	6. 最初と最後の頁 22-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐藤靖明・池谷和信	4. 巻 34
2. 論文標題 バナナから見た地球 「3つの波」の人類誌	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Biostory	6. 最初と最後の頁 32-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yasuaki Sato, Kaori Komatsu, Koichi Kitanishi, Kagari Shikata-Yasuoka, and Shingo Odani	4. 巻 62-3
2. 論文標題 Banana Farming, Cultivars, Uses, and Marketing of Nkore in Southwestern Uganda	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Tropical Agriculture and Development	6. 最初と最後の頁 141-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11248/jsta.62.141	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Yasuaki Sato
2. 発表標題 Changing Dietary Habits of Children in Central Uganda: Whereabouts of Traditional Food Knowledge in Modernization
3. 学会等名 The 42nd Society of Ethnobiology Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤靖明・池谷和信
2. 発表標題 バナナの文化誌の構想
3. 学会等名 生き物文化誌学会第77回例会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤靖明
2. 発表標題 「バナナ文化 - 食・酒・布 - 」
3. 学会等名 生き物文化誌学会第77回例会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasuaki Sato, Kaori Komatsu, Shingo Odani, Kagari Shikata-Yasuoka, Koichi Kitanishi
2. 発表標題 Comparative Study on the Banana-Farming Complex in Uganda and Papua New Guinea
3. 学会等名 16th Congress of the International Society of Ethnobiology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasuaki Sato
2. 発表標題 The Nature of Folk Knowledge about the Diversity of Bananas in Central Uganda
3. 学会等名 22nd Symposium of Australian Gastronomy (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasuaki SATO
2. 発表標題 Social aspects of the maintenance of banana landrace diversity in central Uganda
3. 学会等名 40th Annual Conference of the Society of Ethnobiology (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 四方篤・藤澤奈都穂・佐々木綾子・佐藤靖明
2. 発表標題 アグロフォレストリーの生態人類学にむけて：茶・コーヒー・カカオの事例より
3. 学会等名 第23回生態人類学会研究大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 佐藤靖明ほか	4. 発行年 2017年
2. 出版社 学術研究出版/ブックウェイ	5. 総ページ数 361
3. 書名 環境サイエンス入門 人と自然の持続可能な関係を考える	

1. 著者名 SHIINO W., SHIRAISHI S., MPYANGU CM., SATO Y., et al.	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Research Institute for Languages and Cultures of Asia and African (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies	5. 総ページ数 169
3. 書名 Diversification and Reorganization of 'Family' in Uganda and Kenya: A Cross-cultural Analysis	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------